

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	福岡 達之
論文担当者	主査 阪上 雅史
	副査 岸本 裕充
	副査 越久 仁敬
学位論文名	Tongue Pressure Measurement and Videofluoroscopic Study of Swallowing in Patients with Parkinson's Disease (パーキンソン病患者における嚥下時舌圧測定と嚥下造影検査)
論文審査の結果の要旨	
<p>パーキンソン病 (Parkinson's disease: PD) の嚥下障害は口腔期における舌の運動障害が特徴的である。これまでに固縮や緩慢による舌の運動異常が報告されているが、嚥下時の舌運動と嚥下障害との関連を検討した研究は少ない。本研究では、PD 患者の嚥下時舌圧を客観的に測定し、嚥下造影検査で評価した嚥下障害との関連について検討した。</p> <p>対象は PD 患者 24 名 (平均 70.4 歳) であり、全対象者に嚥下造影検査と嚥下時舌圧の同時記録を行った。嚥下時舌圧は、舌圧センサシートを用いてバリウム水 5mL を嚥下した時の舌圧を測定した。嚥下造影検査から咽頭残留、喉頭侵入・誤嚥の重症度、oral transit time (OTT), pharyngeal transit time (PTT) を評価し、非嚥下障害群 (15 名) と嚥下障害群 (9 名) に分類した。2 群間で舌圧の最大値、持続時間、立ち上がり時間、舌圧勾配の比較を行い、舌圧の時間的項目と OTT, PTT との相関についても解析した。</p> <p>舌圧の最大値は、全測定部位で 2 群間に有意な差はみられなかった。持続時間は、口蓋周縁部において嚥下障害群で有意に延長していた。立ち上がり時間は、嚥下障害群で有意に延長し、圧勾配は低下していた。全波形から解析した持続時間および立ち上がり時間は、それぞれ OTT と有意な相関を示した (<math>r=.716, p&lt;.001, r=.761, p&lt;.001</math>)。</p> <p>嚥下障害を認める PD 患者では、舌運動の開始から舌圧のピークに達するまでの時間に遅れが生じており、嚥下時における舌運動異常の特徴と考えられた。PD 患者に対する嚥下時舌圧測定は、舌運動の定量評価とリハビリテーションに有用な可能性がある。</p> <p>本研究は、リハビリテーション科領域において重要なパーキンソン病患者の嚥下時舌圧に関する研究で、臨床的に有用な知見であり、学位授与に値すると判定した。</p>	